

研究会レポート

北方海域技術研究会 (社)日本技術士会北海道支部／ 北海道技術士センター

『平成 18 年度 日本水産工学会学術講演会・シンポジウム』 及び『平成 18 年度 北方海域技術研究会講演会』の開催

1. はじめに

北方海域技術研究会では、2006 年 6 月 10 日～12 日に『平成 18 年度 日本水産工学会学術講演会・シンポジウム』を日本水産工学会と共催して開催し、2006 年 7 月 21 日には『平成 18 年度 北方海域技術研究会講演会』を開催したので、報告致します。

2. 『平成 18 年度 日本水産工学会学術講演会・シンポジウム』

『平成 18 年度 日本水産工学会学術講演会・シンポジウム』は、2006 年 6 月 10・11 日に函館市・北海道大学大学院水産科学研究院・水産学部で学術講演会が開催され、3 つの会場に分かれて合計 99 編の論文発表が行われました。

最終日の 12 日には函館市・函館市民会館で「地域振興と水産工学技術」をテーマとして、北方海域技術研究会の企画によりシンポジウムが開催されました。シンポジウムでの講演内容及び講演者を表－1 に示します。シンポジウムには函館市民をはじめ 100 名以上の参加者があり、表－1 に示すとおり、公立はこだて未来大・長野章教授の基調講演に引き続き、8 編の個別の講演、さらに「地域振興と水産工学技術」をテーマとしてパネルディスカッションが行われ、熱心な討議がなされました。

3. 『平成 18 年度 北方海域技術研究会講演会』

『平成 18 年度 北方海域技術研究会講演会』は、余市町・北海道立中央水産試験場で開催しました。講演内容及び講演者を表－2 に示します。

菊地氏の特別講演では、ご自身のヨット(双胴船)による太平洋横断やアメリカズカップでのレースの体験談を中心に、低気圧のエッジを利用した針路の

表－1 講演内容と講演者

講演内容	講演者
①基調講演「地域振興に貢献する水産工学技術」	公立はこだて未来大学 長野 章 氏
②水産物流通効率化システムの開発	(財)漁港漁場漁村技術研究所 阿部 龍介 氏
③IT トレーサビリティの活用による水産産業振興	(株)アルファ水工コンサルタンツ 若林 隆司 氏
④漁港における衛生管理対策の効果	(財)漁港漁場漁村技術研究所 大島 肇 氏
⑤地域協働プロジェクト「地域マリンビジョン」	北海道開発局 農業水産部水産課 中泉 昌光 氏
⑥地域連携に果す「学」の機能	北海道大学 水産科学研究院 山下 成治 氏
⑦産業連関表を用いた政策の効果評価	(有)マリンプランニング 古屋 温美 氏
⑧CO2 削減、物質循環等からの漁業及び漁村社会の環境評価	(株)北電総合設計 篠原 伸和 氏
⑨漁業地域における地震津波対策について——被害予測手法の開発——	(財)漁港漁場漁村技術研究所 水谷 将 氏

決定、速度の確保とそのための気象予測の重要性などについて興味深いご講演がなされました。

ご講演後には、

○低気圧をどのように利用しながら太平洋を横断するのか？

○コロンブスの時代には、風と燃料で世界中を航海していたが、当時の帆船のスピードはどのくらいか？

○帆船とヨットの相違、性能の相違は何か？
などといった質疑が活発になされました。

表－２ 総会・講演会の内容と講演者

講演内容	講演者
①特別講演 「太平洋横断記」	北海道国体ヨット競技強化コー チ (太平洋横断最速記録保持者) 菊地 透 氏
②講 演 「藻場造成の問題と 現状」	中央水産試験場 水産工学室 金田 友紀 氏
③講 演 「トレーサビリティ の現況と課題につい て」	海洋水産システム協会 山内 和夫 氏
④講 演 「河川の持つ浄化機 能」	中央水産試験場 水産工学室 福田 裕毅 氏

続いて、金田氏の講演では、①磯焼けの現状、②磯焼けの原因、③磯焼け対策、及び④藻場造成の問題点などについて研究報告があり、特にウニの食圧に対する磯焼け対策として、ウニの摂食限界流速(0.4 m/sec)と季節的な流速変化との関係に着目して、コンブ群落を維持する施設の条件などについて興味深い説明がありました。ご講演後、会場からは、

- 空気ポケットフェンスについては、しばらく海中に入れておくと空気が抜ける問題があり、維持管理が大変という印象を持っているが、どのように考えているのか？
- ウニフェンスのうち、刺網フェンスは現場での成功例はあるのか？
- 底面流速 0.4 m/sec の定義は？

などといった質疑が活発になされました。

山内氏の講演では、①水産物トレーサビリティの現状、②課題、及び③平成 17 年度に実施した実証実験と開発における新たな課題などについて研究報告がありました。J-Fish Web サイトの活用によるトレーサビリティシステムは開発途上であり、平成 18 年度には統合型水産物安全・安心トレーサビリティシステムの確立に向けて、①安全管理の高度化、②機能拡充、及び③利活用拡大を図っていくとのことでした。ご講演後、会場からは、「水産物の流通には、様々な立場で多くの人が係っているが、完全にこのシステムを普及させるのに、どのような見通しを持っているか？」といった質問がされました。

最後の福田氏の講演では、窒素の酸化過程である硝化作用に着目して、河川の浄化機能について研究報告がありました。浸透層の形成と浸透流の発生による水質の浄化において、瀬が重要な働きをしているなどの知見が定量的に説明されました。ご講演後、会場からは、

- 浸透層が粘土のような土質の場合には効果はどうか？
- 浸透層の瀬において、幅はどのくらいであれば有効か？
- 浸透層の遅い流れを、どのように測定したか？
- 浸透層の粒径の差により、細菌数に相違があるのではないか？

などといった質疑が活発になされました。

(文責：北方海域技術研究会幹事長 寺島 貴志)